

【ⅢA：共同研究】

司会：渡会 純一

武本 京子・山口茉莉子・安田 実央・松川侑里香・小坂 有紀

「イメージ奏法」の楽曲分析による演奏法と教育への適用

—大学でのピアノ演奏指導と小学校音楽教育—

【要旨】

1. 「イメージ奏法」の教育現場への導入

「イメージ奏法」注)とは、武本京子が考案し、楽曲を分析し、それを「言葉、色、絵、文字、表現曲線」等で表現し把握することにより、楽譜から導き出された「イメージ」を奏法に結び付ける「独創的なピアノ奏法&教育法のメソッド」である。

具体的には、①作品の背景を調べて楽曲分析をする②イメージ語を考え、その言葉から物語を作成し、全体の構成を考える③イメージを実現する具体的な奏法を誘導する「表現曲線」を記入した後、曲のイメージに相応しい色を楽譜に着色し、「演奏設計図」を作成して練習にのぞみ演奏を完成させる。

今回の発表では、教育現場への「イメージ奏法」導入方法と、指導者と学生の「対話」により音楽の研究に取り組むことにより、主体性のある表現研究への意欲増大になった実践例とともに、「イメージ奏法」の教育への適用と効果を述べた。

その結果、一方通行でない、「双方向教育の実践」が可能なこと、何を表現するのか、どのような練習をして、具体的な奏法を習得してイメージを実現させるのか、自分で考え、表現できるという「自立できる力の育成」が出来る事などを述べた。

また、大学でのピアノ演奏指導における「イメージ奏法」の実践研究3例と小学校における「イメージ奏法」導入方法と実践報告を「演奏設計図」を提示しながら以下のように行った。
(武本 京子)

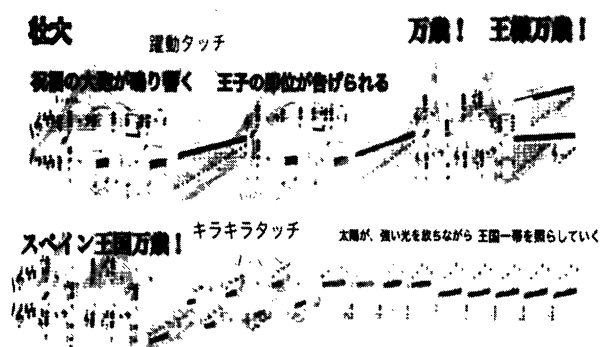
2. 「イメージ奏法」から導き出された リスト《スペイン狂詩曲》の超絶技巧が奏でる音楽の深み

リストは、「ピアノの魔術師」と呼ばれる通り、超絶的な技巧を持つ当時最高のピアニストであり、また演奏に際し超絶技巧を要する作曲家でもある。

リストの楽曲を演奏する際は、こうした超絶技巧の追究に終始しがちだが、「イメージ奏法」の実践により、表現の可能性について考察した。

「イメージ奏法」の実践の結果、超絶技巧の奥に隠れた作

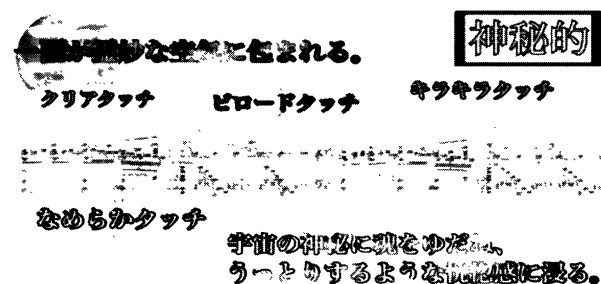
曲家の思いを汲み取り、自分のイメージを重ね合わせ、そのイメージから様々な具体的な奏法を見出すことができた。本発表では、「イメージグラフ」や「演奏設計図」を提示し、演奏を交えながら奏法の解説を行った。(松川 侑里香)



【図1】イメージ楽譜「リスト：スペイン狂詩曲」(1～9小節)

3. 「イメージ奏法」から導き出された スクリャービン「宗教的哲学理念と音楽の結合」

ピアノソナタ第5番を「イメージ奏法」にて分析し、革命前の混乱した社会情勢の中でスクリャービンが神秘的芸術観を育てていった背景と、それを實現する為の独自の新しい和声システムの構築、それらの楽曲分析に基づいた神秘主義思想の音色について考察した。



【図2】イメージ楽譜「スクリャービン：ピアノソナタ第5番 OP.53」(381～388小節)

その結果、「宗教的哲学理念と音楽との結合」の意図は聴き手を神秘の世界へ没我させる倦怠を伴った響きに見受けられ、自身の価値を崇高な世界へと求めたスクリャー

ピンの難解な精神世界を読み解くことができた。今回の発表では、楽譜に色や物語をつけることにより、スクリーヤピンの芸術観に基づいた多彩な響きを追究する可能性について述べ、さらに「演奏設計図」を示しながら、イメージ奏法から導き出された具体的奏法の実践による解説を行った。(安田実央)

4. 「イメージ奏法」から導き出された ショパン バラード第一番の音楽と文学的標題

バラード第1番を題材に音楽と文学の関係性について考察した結果を発表した。多くの説があるが、この作品はショパンと親交が深く国民的ロマン派詩人であるアダム・ミツキエヴィッチの詩から啓発されている事から考察し、文学の背景を語る手法として、ショパンがどのような音色、旋律、リズムを使用しているのかを「演奏設計図」で示し、演奏と共に具体的奏法を発表比較した。



【図3】イメージ楽譜「ショパン:バラード第1番」(203-211小節)

その結果、作曲家の感情を汲み取り、自ら思い描くイメージを色や文字で表すことにより楽曲に対するイメージが明確となり、より深く作品を理解することができる事を示した。(山口茉莉子)

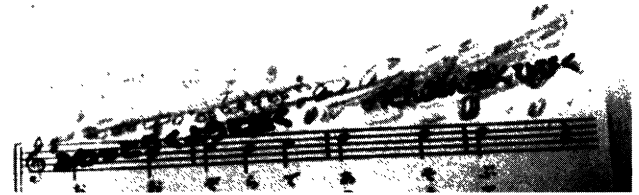
5. 小学校音楽教育での実践

大垣市立興文小学校3年生の児童は、音楽が好きで楽しく表現活動をしている。しかし漠然としたイメージや思いのままに活動している場合が多く、「こんなふうに歌いたい!」という自分の思いをもって表現する活動は十分ではなかった。そこで指導過程に「イメージ奏法」を取り入れ「イメージ楽譜」を作ることで、自分のイメージを明確にもち、それを音で表現していく児童の変容や指導過程の有効性について、教育現場での活用実践報告と効果を発表した。

「イメージ奏法」導入前、「明るく楽しく歌いたい」と答えていた児童は、導入後、図のように具体的にイメージをもち歌唱表現をするようになった。

音楽表現が楽しく追求でき、演奏する喜びを感じる児童が6割から8割に増えた。「イメージ奏法」の有効性を感じ、

今後は他学年でも実践したいと述べた。(小坂 有紀)



【図4】小学校に於ける歌唱指導に応用したイメージ奏法

6. 全体の考察

教育現場への「イメージ奏法」導入により、教師と生徒の「双方向教育」が可能になり、生徒の音楽表現に対する自発的な意欲の向上の効果が上がった。今後は、小、中、高等学校への音楽への適応を図っていく必要がある。

(武本 京子)

【質疑応答】

上原由記音(ピアノ):曲やフレーズによってイメージが持てない場合、指導者の立場でどうヒントを与えているのか。

武本:プロジェクターでイメージを映し、選択法などで答えを導いている。学生相互に意見を交換させ、音楽の表現の可能性を提示している。

上原:学生の精神的な成長の差異で「ピンと来ない」場合はどのような指導をしているのか。

武本:その人が分かる世界に教師が設定を変えている。音の連なりから自分が感じたものを言葉で表現することから始め、導きたい世界へ誘導し理解を深めている。

【注】

*中田(武本)京子(1995)『楽曲イメージ奏法』ドレミ楽譜

*武本京子(2013a)『ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」解説書』音楽之友社

*武本京子(2013b)『ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」によるワークブック『ブルグミュラー 25の練習曲』音楽之友社

発表者:武本 京子(ピアノ/愛知教育大学)

山口 茉莉子(ピアノ/愛知教育大学)

安田 実央(ピアノ/愛知教育大学大学院)

松川 侑里香(ピアノ/愛知教育大学大学院)

小坂 有紀(初等音楽教育学/大垣市立興文小学校)

司会者:渡会 純一(初等音楽教育学/東北福祉大学)